先生なら、どうしますか？

教師は、生徒の「どうあるべきか、どう生きていくか」という答えが1つではない問いに、生徒とともに日々向き合う。教師としての指導観を問われた「あの瞬間」を、当事者の教師が振り返る。

「もう喫煙するな」と私。「外では吸わないで」と母親。すれ違った教師の正しさと母の思い

静岡県・私立沼津中央高校
後藤松太郎

ごとう・まつたろう ● 同校に赴任して27年目。教頭。進学課長として同校の進路指導を長く牽引してきた。2023年度の創立100周年を契機として、24年度に通信制課程を新たに設置することになり、その中核的な役割を果たした。

25年ほど前、初めてのクラス担任としてかかわった2年生男子のAさんは、度重なる喫煙によって中途退学寸前の状況にありました。反抗的なAさんを独力で育てるAさんの母親の苦労を察していた私は、担任である自分の力で彼を更生させたいと思い、禁煙に成功した知人の話を彼に聞きに行かせたり、休日に一緒に座禅を組んだりと、喫煙をやめさせるために様々な指導を行いました。「もう吸うなよ」「分かった」。彼とそんなやり取りができるようになり、「私の思いは伝わった」と、すっかり私は安心していました。

しかしその後もAさんは喫煙をやめられず、中途退学となりました。彼の最後の登校日、「吸わないと言ったじゃないか」と恨みがましくつぶやいた私に、彼は言いました。「お袋からも、外では吸うなと言われたんだけど……」。私はあぜんとしました。いくら担任の私が喫煙するなと言っても、母親が「家の中なら……」と言えば、子どもは喫煙をやめないでしょう。喫煙についての考え方を母親と目線合わせをしなかった自分を責めました。自分のミスがAさんの中途退学を招いたという後悔は、私の心に残り続けました。その後、Aさんが県内で社会人として頑張っているといった近況を聞くこともありましたが、その度に、彼に対する申し訳なさがよみがえりました。

Aさんが学校を去って10年以上が経ったある日、私は地元の食料品店で、青年となったAさんが歳を重ねた母親を支えるように買い物をする姿を見かけました。彼が私に気づき、会釈をしたような気もしましたが、私は過去の申し訳なさから、声もかけずにその場を後にしてしまいました。

その一件以来、「私はこれまで、母親との目線合わせを怠ったことを悔いてきたが、それは母親を自分の味方につけたかっただけなのではないか」と考えるようになりました。「喫煙は駄目だ」ということだけの目線合わせをしていたら、母親とAさんを対立させてしまったかもしれない。そうなっていたら、寄り添い合うように買い物をしていたあの親子の姿を、私は目にすることができなかったのではないか。反抗的な息子の気持ちを何とかしてつなぎとめようとしていた母親の思いを理解できなかった自分の未熟さを思い知りました。しかし、教師としては喫煙を容認することはできなかった。では、あの時、私に何ができたのか。Aさんと母親に対して、私はどんな行動を取ればよかったのか。その「答え」を私はまだ見いだせていません。

社会のルールは当然守らなければならない。では、教師としての正義を貫くことと、親子の関係を守ることをどうすれば両立できたのか。後藤先生が今も抱える葛藤を語ったウェブオリジナル記事を、ぜひご覧ください。

https://view-next.benesse.jp/view/web-hs/article35957/

※プロフィールは、2026年3月時点のものです。
イラスト：カモ